The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	障害児を育てる母親の視点の深化の過程に関する一考察 : 重症心身障害児を育てる母親の事例と神話や伝承に見られる童児神のモチーフをもとに
Author(s)	石川, 友香
Citation	大阪大学教育学年報. 2001, 6, p. 289-300
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5773
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学教育学年報 第6号（2001年）
Annals of Educational Studies Vol.6

障害児を育てる母親の視点の深化の過程に関する一考察

－重症心身障害児を育てる母親の事例と神話や伝承に見られる童児神のモチーフをもとに－

石 川 友 香

【要旨】

人には両極的な二つの側面があるということ、そのことに気付くということはある意味でとても難しいことであるが、それ故に重要なことである。本研究においては、それに気付いていく一連の過程を「(ある事象に対する)視点の深化の過程」と捉えて、J.ヒルマンが論じている「見抜く（seeing through)」過程をもとに想定した。そして障害児を育てる母親に面接調査を行い、障害児を育てることを通じて生じてきた彼女たちの視点の深化の過程を具体的に示すとともに、その過程に関して深層心理学的な観点から考察した。また、今回の調査対象であった母親の視点の深化の過程を推し進めることにもなった障害を持った子どもにも目を向け、障害を持った子どもとは本質的にはどのような要素を有した存在であるのかということについて「神話的モチーフ」という概念を通じて考察を試みた。特にギリシャ神話における牧神パーンと日本神話・伝承におけるヒルコとえびす神をとりあげることによって、それらの童児神が有していると思われる要素について論じ、その要素は母親が障害を持った子どもや母親自身に関して抱く両極的なイメージと関係があるのではないかと考えた。

1. はじめに

障害児を育てる母親についての研究は、様々な角度から行われている。それらの研究はおよそ「母親が必要とする支援に関する研究」、「母親のストレスに関する研究」、「母親の養育態度に関する研究」、「心理的適応過程に関する研究」に大別できる。そして、その研究方法も質問紙法による調査、面接調査などの方法で行われている。

しかしながら、それらの研究では「障害児を育てる母親」をむしろ「特別な問題を抱えている母親」として扱っているものが多く、彼女たちが子どもを育てることを通じて経験したことは、本質的にはその他の母親、さらには一般の人の経験の中でも生じ得ることであるという見解のもとに論じられているものではないように思える。確かに障害を持った子どもを育てるがゆえに、特別な経験をしたり問題を抱えているのは事実であろう。しかしながら、彼女たちはそれらの様々な経験を通して、私たちよりも自分自身のあり方、考え方を見つめることに直面しやすい状況に置かれているとも考えられる。おそらくこのような状況に置いて障害を持つ子どもを育てる母親は様々なことを考えるのであろうと思われる。そこで今回の研究では、障害を持った子どもを生んだことや育てることを通じて、母親がそれまでとは違った視点からも事象を眺めることになり自分の心の中に両極的な二つの考えを抱いていく過程を「視点の深化の過程」として捉え、それをJ.ヒルマンが表現している「見抜く（seeing through)」という過程（1997）をもとに見ていこうと思う。

2. 視点の深化の過程

(1)J.ヒルマン の「見抜く（seeing through)」過程について

J.ヒルマン は「見抜く（seeing through)」という語の定義を

見抜くことは、脱字義化する過程であり、観念を手段として事物の
核心にある想像界的なものを探求することである (J. Hillman 訳書 1997、265 頁)

と示している。つまり、「見抜く」ということは目の前に現れている物事や問題を「そのまま」受け取るのではなく、何らかの(その時のその人なりの)様式で考え、眺めたりすることをくり返すことによって、さらに深い意味へと「内的に探求」することだというのである。そして J.ヒルマン はこの「見抜く」という過程を一連の四段階にまとめている。

①心理学的契機(psychological moment)がある段階

心理学的契機(psychological moment)とは「すなわち反省とか驚きとか困惑といった契機(moment)」(J. Hillman 訳書 1997、272 頁)のことであると示されている。つまり、私たちが今までとは違った視点からある事象を眺めるようになる時には、反省、驚き、困惑といったような感覚を経験するということである。そしてこの後、このような感覚が生じてきた理由を示そうとあれこれと考え始めることによって次の段階に入っていくのである。

②心理学化が自らを正当化する(justifies itself)段階

反省、驚き、困惑といったような感覚を体験した後、「あれはどういう意味だったのだろう」とか「他にどんなことが起こっているのか」というような疑惑や洞察などが徐々に、または突然に生じてくる。そして、その疑惑や洞察を明らかにしようとあれこれと考えた結果、見えてきたものが所与の事柄よりも現実的あるいは真実ではないかと信じるようになることを示している。

③今ここにある問題、目の前の現象に物語(narrative)が与えられる段階

ここで述べられている「物語(narrative)」とは、いわゆる分析的な説明や統辞論的説明とは違い、その人の空想を含んだお話ということを示している。それ故に、ある事象を通じて見えてきたものがお話として語られるということは、その語られた「お話」が字義的な意味での「お話」に留まらず、いわば特定の「生きた経験」に作り上げられて語られるということである。そして、お話が語られ、経験となっていくことを通じて、その人においてのある事象の認知は転位し、変容し、時にはそれらは新たに創作されたりもするのである。また、このことはその人の「経験」となるので、お話が語られた後、その人は今までとは異なった経験を持った人に変化している。

ここで J.ヒルマン は、第二、第三段階が生じたからといって「実際に起こっているものをよりよく、あるいはより確実に知ったわけではない」(J.Hillman 訳書1997、276頁)と警鐘している。あくまでもこれらの段階は、ある事象を字義的で客観的に捉える状態から脱して、その奥にある意味を考え、見えてきたものを信じて個人の経験としていくことに過ぎないのである。

④見抜く(seeing through)ための道具として観念をもちいる段階

第一、第二、第三段階を通じてその人に見えてきたものはどのようなものであったのか、ということ観念を用いて説明しようと試みることを示している。そしてこのような試みをした結果、事象を見抜く(seeing through)ことに至るということである。

これらの段階について、J.ヒルマン は「見抜くことが四つの『段階』全てを必要としており、この四段階が同時に進行することもありうる」(J.Hillman 訳書 1997、274頁)と述べており、「見抜く」ためにはどれも欠かせないことを強調している。このような J.ヒルマン の「見抜く」ことの過程は、しかしながら実際には様々なレベルがあるとも考えられている。おそらく先述の「見抜く」過程において、J.ヒルマン は主に出来事・日常を壊していくような病的な(pathological)形での体験を通じて生じるという、かなり深いレベルでの過程を想定しているように思われる。

(2)重症心身障害を持つ子どもを育てる母親の視点の深化についての仮説

以上のようなJ.ヒルマン の「見抜く(seeing through)過程」をもとに、重症心身障害を持つ子どもを育てる母親に生じてくるであろうと思われる「視点の深化の過程」を想定してみた。

Ⅰ　考え方が変わるようなある出来事が生じる

まず、今まで抱いていた考えと異なった考えが生じてくるためには、そのきっかけとなる出来事の存在が不可欠である。そこで、まず最初の段階として、母親がそれまで抱いていた考え方とは異なった考えが後に生じてくるきっかけとなる出来事を示すこととした。

Ⅱ　その出来事がきっかけとなって以前とは違う考えが生じてくる

前段階の「Ⅰ」であげられた出来事を通じて、母親に生じてきた考えを示すこととした。また、この段階で示される考えは、それまでのものとおよそ対極的な考えであり、これまで抱いていた考えよりも正しいのではないかと母親が感じるような考えである。

Ⅲ　以前とは違う考えがさらに発展する

母親が「Ⅱ」で生じてきた考えを抱き続ける中で、さらにその考えが発展してゆき、母親自身のその後の生活により密着したものになっている考えを示すこととした。

Ⅳ　Ⅰが生じる以前の考えとそれとは違う考えの両方が併存する

Ⅰが生じる以前の考えとⅢで生じてきた考えは、両極的なものであろうと想定される。そして、この段階では、これら両極的な考えが同時に併存している状態を示すこととした。

このような四段階を想定してみたのであるが、実際にはどのような様子で現れているのであろうか。本研究では、重症心身障害を持つ子どもを産んだこと、またはその子どもとの生活を通じて、母親がどのようなことを考えて、そしてその結果、母親が自分自身やその子ども、周囲の世界をどのような視点から見ることになったのか、ということを中心に面接調査することによって、個々の視点の深化の過程を見ていくこととした。

3. 視点の深化についての調査

(1)調査の概要

今回の調査は、重症心身障害児を育てている母親6名を対象に平成11年6月～9月にかけて行われた。調査方法としては半構造化面接法でインタビューを行い、重症心身障害を持った子どもが生まれた時から今までにどのような出来事があったか、その間に母親がどのようなことを考えたのか、またはどのように考えが変わっていったのか、ということを中心にかなり自由にお話していただく方針をとった。その中で「それまでは～と思っていたのに、それからは…と思うようになった」という話が出てきたときに、その考えの内容、その変化が生じた時期、きっかけなどについて詳しく聞くことにした。また、現在はどのような考えを抱いて生活を送っているのかということも聞くことにした。

(2)分析の概要

調査において録音されたインタビューの内容を全て書き起こし、それを通読することで母親によって語られた内容の全体像を把握し、さらにその理解を深めることに努めた。また、言葉として表された内容以外のサイン（インタビュー中における話す早さ、声のトーン等）も記録しておき、何らかの心的なものを表現している情報として重視し、考察の際に参考にした。

インタビューの内容は、J.ヒルマン の「見抜く過程（seeing through ）」を参考にして筆者が想定した重症心身障害児を育てる母親の視点の深化の過程「Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」の四段階をもとにして分析された。分析方法としては、書き起こされたインタビューの中で「それまでは～と思っていたのに、それからは…と思うようになった」という内容に注目し、その変化が生じるきっかけとなった事象（Ⅰ）、その事象が生じる以前の考え（Ⅰ以前の考え）、その事象が生じた後の考え（Ⅱ）をまず抽出した。その後、事象が生じた後の考えを抱きながら生活していった結果、その考えがどのように発展していったのか、ということが話されている内容（Ⅲ）を抽出し、さらに現在において抱いてもⅢで抽出された考えとⅠ以前の考えとの両方の考えが存在しているという内容（Ⅳ）を抽出した。その後、改めて抽出された内容がそれぞれⅠ

～Ⅳ段階に相当するのか検討した。

4. 事例

面接調査の対象となった母親は6名であり、その中で筆者が前項で想定した重症心身障害児を育てる母親の視点の深化の過程の「Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」の四段階の過程を示しているのが4名であった。また、「Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」まで示されて「Ⅳ」はまだ示されていないという、いわば三段階でとどまっていると思われるのが1名、「Ⅰ、Ⅱ」まで示されているものの、その後の様々な経験を通じて、それまで抱いていた考えと対極的な考えを自分のものとして抱くことは最終的には出来ないと語っているのが1名であった。

本論文においては「Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」の四段階の過程を示しているものと、三段階まで示されているものに焦点を当てて論じていきたいと思う。その為、本項では全事例の中から特に四段階の過程の特徴を示していると思われた2名と三段階までの過程の特徴を示していると思われた1名の内容を呈示し、その内容を検討していこうと思う。以下においては、面接調査で話された全内容の中から、特に「母親の視点の深化の過程」を示していると思われる箇所を抜粋して示す（家族構成、年齢等はインタビュー当時のものである）。

(1)事例１：Aさん

①家族構成

夫…27歳　Aさん…31歳（元教師）　長男ａ（本児）…1歳6ヶ月

②母親の視点が深化していく様子

「aを産む前は、学校でも職場でも障害を持つ人に関して可哀想なことはないって口では言っていたんですよ。でも口では言うわりになんで可哀想って言ったらあかんのやろうって、やっぱり可哀想やんかって。なんとなくは分かってんけど、はっきりそうとは思えなかったけど。…それが、可哀想やと思ったら、この子の人生は可哀想になるけど、それはそれで楽しい人生が待っているかも知れないと思うと障害を持っている人に可哀想と言うのは失礼やなぁと思ってみたり。…<きっかけは>『学校』って言う映画を見て本人が幸せだったらええ、幸せなんちゃうかって言うのを聞いたり。（同じ頃にニュース番組で障害児の特集を見て）手足のないことが可哀想でも不幸でもなんでもないやんってことをあの時、フッと思って。たぶんあの時期はそう言うことに敏感だったと思うんですよ。…やっぱり毎日毎日生活をしている中でね。まあ、大変やけどａを産んでよかったと思っていることろにその話が入っていたから、スッと合点が行くって感じですか…やっぱり考えてみたら、可哀想だと思うのは私の尺度であって…私の幸せ観というのは私の経験の基の幸せ観であって、それは誰にでもあてはまることではないって…他の子の成長を素直に喜べるようになったんで、この子はこの子で成長しているんやんかってやっと思えるようになってんけど、それでも、もし、もしは人生にはないってよく言うねんけど、もし、こんなんやなかったら、今頃こんなんかって、思ったりするし。それほど、昔ほど、悲しんではいないけど、どっかにはずっとあると思う。やっぱり『もし』って言うのはありますね」。

Aさんは以前は障害を持っている人に対して「可哀想だ」という感情をどうしても抱いてしまっており、自分の子どもに対しても最初はそのような感情を抱いていた様子だが、障害者の生活をテーマにした映画やニュースを見ること（Ⅰ）によって、本人が幸せだと感じていれば幸せなのではないか、障害を持っているという理由だけでその人が不幸であるということになるわけではない、ということを感じている（Ⅱ）。そしてこの考えが基になって、自分の幸せ観は誰にでも当てはまるものではなく、障害を持つ人に対して可哀想だと思うのはあくまでも自分の尺度からの思いであるため、失礼なことだと思うようになっている（Ⅲ）。これらの考えは、以前Aさんが抱いていた感情とは正反対に近いものがあるのだが、だからと言って以前の悲しみの感情が全くなくなったわけではなく、やはり時折感じてしまうものであると語っている

（Ⅳ）。

(2)事例2：Bさん

①家族構成

夫…48歳　Bさん…39歳　長女b（本児）…15歳　次女…12歳　長男…8歳

②母親の視点が深化していく様子

「初めての子で不安だし、主人は会社に行っちゃったし。すごいね、泣き方がすごいんですよ。…だから、自分の神経は多分おかしくなってて。疲れてて。…不安でしたよね、一人で見ていて、誰も周りにいないわけだから。…定期検診行くのも、辛いんですよね。周りに元気な子がいて、ハイハイしたりとか、お座りしたりとか。それができないで、ただ見ているだけだから。すごい辛かったんですね。…手は生まれたときから開かないで握った状態だったんですね。段々リハビリやっているうちに手が開いてきてくれて。手が使えるようになってきたんで。ビスケット、柔らかいものだったら、自分でも持って食べられるようになったんで。ニコニコ表情も出てきて。…そういう成長は嬉しかったですね。…そのひとつひとつの小さいことが親にとってすごく嬉しい。そんなの当たり前じゃないって、他の健常児のお母さんは言うけれども、ひとつひとつが嬉しかったですね」。「通園に行って、いろんなお母さんと知り合えていろんなお子さんと知り合えてすごい私にとってはプラス。ひとつの財産て言うんじゃないけど、友達が増えて、周りから親切にされて、bも親切にされて、可愛がってもらえて。すごいね、幸せ。確かに大変は大変だったけど、私にとってはすごい良かった」。「十人十色で、全く違うわけだし。…いろんな人に対する思いやりっていうのを教えてくれたのは、bです。bみたいな子をもって、幸せ。私は自分も親として成長できたし、人にも親切にできるようになったし、痛みも分かるようになったから」。「皆さんは会うと『可哀想ですね』って。…ねえ、何が可哀想？確かに病気は持っている、障害を持っているのは大変。でも、親がちゃんとやってあげていて…bは頭の中でどう思っているのかは分からない。でも、『可哀想ね』って何もしてくれないのにただ『可哀想ね』っていう一言だけで。そういう前に、言葉に出さなくても良いから困った人を助けるとか、何かしてあげて欲しいなって思いますね。『可哀想ね』って言われると、グッと落ち込む。そうかなぁって。…でも、親もやっぱり可哀想に思う。さっき、可哀想ねって言ってた人がいるって言ったけどやっぱり親も不憫に思う部分があるから。…だけども『(きょうだいの中で) 誰が可愛いの？』って聞かれて『みんな可愛いわよ』って言うけど、本当はbが一番可愛い、やっぱり手の掛かる子、ちょっと特別な目で見ちゃうかな、やっぱり可愛い」。

bちゃんはBさんにとって初めての子どもであったこともあって、育児に不安を抱き、落ち込んだりして殻に閉じこもっているような状態であった。また、外に出ると健常な子どもとの発達の差を思い知らされて辛い思いをしたり、子どもがとても可哀想に感じていた。しかし、ゆっくりではあるがリハビリを通じて発達してきたこと、母子通園等を通じて多くの親切な人と出会うことによって（Ⅰ）、子どもが障害を持っているということは辛く可哀想なことばかりではないことを感じるようになる（Ⅱ）。また、このような気付き、出会いを通じてBさん自身も他人に親切にしてあげられるようになったと感じており、これらのことをもたらせてくれたbちゃんに感謝の気持ちを抱いている（Ⅲ）ということも語られている。確かに、bちゃんについて以前と同じように可哀想にも思うが、きょうだいの中では一番可愛い子どもだと感じており（Ⅳ）、両極的な考えを抱えていることが述べられている。

(3)事例3：Cさん

①家族構成

夫…41歳　Cさん…42歳（元会社員）　長女…13歳（中1）　次女c（本児）…9歳（小4）

②母親の視点が深化していく様子

「自然の摂理で流産になったら、しゃあないなぁって思っていたところがあったんですよ。…自然淘汰ですよね。だけど今の医学のお陰でこの子は生きている。自然に任せていればこの子はすでに存在していないんですよ。だから自然淘汰に任せてって言うのは、ものすごく強者の言葉であってそれに逆ろうても生きたい命って沢山沢山あるから、自然淘汰って言葉は絶対に使わなくなったんですよ。私もね、驕ってて…今までは体力もあったし、どこに行ってもサバイバルでは勝ち残れるわっていう強い私だったんですが、あの自然淘汰だけではいけないなってすごく思いました」

cちゃんを産む前までは、Cさんは世の中では強いものが生き残って当然であり、Cさん自身、自力で強く生き抜く自信というものがあったのだが、妊娠した双子の一人が体内で死んでしまったということともう一人も仮死状態で生まれてきた（Ⅰ）という事実に直面して、医学の力があれば弱い子も生き残れる、ということを強烈に感じることとなった（Ⅱ）。それからというもの、「自然淘汰に任せて」という言葉は、ものすごく強者の驕った言葉であり、それに逆らってでも生きたい命はたくさんあるということを強く思うようになったと語っている（Ⅲ）。

5. 視点の深化についての考察

前頁においては、面接調査で得られた内容をⅠ～Ⅳの段階にまとめて各々の「視点の深化」の様子を眺めてみた。本頁では面接調査から得られた各段階の様子をもう少し内面的な側面から眺めていこうと思う。

(1) Ⅰ（「考え方を変えるようなある出来事が生じる」段階）とⅡの段階（「その出来事がきっかけとなって以前とは違う考えが生じる」段階）について

ある出来事が生じ、それがきっかけとなって以前とは違う考え、すなわちそれまで抱いていた考えと対極的なものとなる考えが生じてくるということについては、二つの見方があるように思われた。そのうちの一つは字義通りの意味で、ある事象が生じたことがきっかけとなって、それまで気付くことなく心の内部の奥深くに存在していた対極的な考えに、母親が気付くことになったということである。これを明確に示しているのは、Cさんの過程であろう。これは外的な事象が心の内部にある対極的な考えの存在を気付かせた、という過程ともいえる。しかしながら、今回の面接調査の中ではそれとはまた別であろうと思われる過程もみられた。それは、以前とは違う対極的な考えが母親の心の内部で発達してきた時に、その考えを意識化するような外的な事象をタイミングよく捉えることによって、母親はその考えの存在に気付くことになったということである。つまり、心の内部にある対極的な考えがタイミング良く外的な事象を利用して母親の意識に昇ろうとする過程である。この過程には何らかの「内的な力」と呼べるようなものが心の中にあるために生じているといわれている。しかし、このような力の働きはどのようにして生じてくるのかということに関しては、外から与えられたり、育てられるものではなくて、個人の心の中で育っていく力であると考えられているだけで、未だに明確にはされていない。だが、少なくともその力が働く「時」があることは確認されている。このことについては、Aさんの過程において語られている。

Aさんは、以前は障害を持っている人に対して可哀想だという感情を抱いていたのだが、障害をテーマにした映画やニュースを見たことがきっかけとなって（Ⅰ）、「本人が幸せだと感じていれば幸せなのではないか、障害を持っているからといってその人が不幸だというのではない」と思うようになった（Ⅱ）と語っている。そしてこのような考えを抱いた「時」について、面接調査の中では「たぶん、あの時期はこういうことに敏感だったと思うんですよ。たぶん、もっと早い時期にね、あれを見てもね、可哀想なのは可哀想だと思ったやろうしね。何にも頭に入ってこなかったやろうしね」と述べている。

もちろん、外的な事象と内的な力は密接に絡み合っているものであるため、どちらが先行しているといいがたい場合もある。しかし、いずれにせよ外見的には「ある出来事をきっかけとして、ある考えが生じる」ということが起こっており、生じてきた考えというのはそれまでと抱いていた考えとはおよそ対極的な考えであることが多いようである。それゆえに、Ⅱの段階に至るということはそれまでとは異なった視点を得ることともいえよう。

ところで、それまでとは違った視点から事象を眺めることによって見えてきたものについて母親たちはどのように感じていたのであろうか。今回の面接調査の中ではその大半が「以前は～というように思っていたんですけど、あの時（ある事象が起こったとき）…と思ったんですよ」と自信を持って語られることが多かったように筆者には感じられた。その様子は、以前抱いていた考えよりもある出来事を通じて見えてきた考えの方がより正しいものだと感じているかのようでもある。

(2) Ⅲの段階（「以前とは違う考えがさらに発展する」段階）について

i）Ⅲの段階に至るということ

ある事象を見る視点は、今までとは違った、いわば対極的な見方を提供するだけにとどまらずさらに深まっていくこともある。

Bさんの過程からは、以前は障害をもつ子どもに対して可哀想に思っていたBさんが、母子通園等を通じて多くの親切な人に出会うことによって（Ⅰ）、子どもが障害を持っているということが辛く可哀想なことばかりではないというようなことを感じ（Ⅱ）、Bさん自身も他人に親切にしてあげられるようになり、これらのことをもたらせてくれたbちゃんに感謝の気持ちを抱いている（Ⅲ）という様子が見られる。その他の母親の過程にも、以前とは対極的な考えを抱いて生活を送ることが母親に実際の生活や人間関係の捉え方に影響を及ぼしたと感じている様子が語られている。

ところで、面接調査においてⅢの段階からⅣの段階に移行せずにⅢの段階で安定している内容、つまり両極的な考えを同時に心の中に持ち合わせようとすることなく、以前とは対極的な考えだけを抱くことによって、安定しているように思われるものが見られた。確かにある時がくればⅣの段階へと移行するのかも知れない。しかし、ここで一時的にせよⅢの段階で安定しているということはどういうことを示しているのか、ということを考えてみようと思う。

ii）Ⅲの段階で留まるということ

今回の面接調査においては、現在において以前抱いていた考えとは対極的な考えがさらに発展している考えを抱いている様子が語られているだけで、以前抱いていた考えをも同時に抱いている様子が明確には語られていない内容も見られた。このような状態については様々な見方があろうかと思われるが、ここでは「モラル」という概念を用いながらその説明を試みようと思う。

面接調査において語られた内容を見てみると、母親たちが以前は障害者、障害を持つ自分の子ども、母親自身に対して否定的な感情を持っていたというものがある。このような考えに「モラル」という内面的な規範に関わる一種の尺度を用いると、以前の考えはいわば「反モラル的な考え」に近いものとなっているといえる。そのため当然のことではあるが、ある事象をきっかけとして新たに見えてきた対極的な考えは、障害者、障害を持つ自分の子ども、母親自身の存在を尊重するという「モラル的な考え」に通じるものとなっている。一般的に「反モラル的な考え」は「好ましくない、悪い考え」であり、「モラル的な考え」は「好ましい、良い考え」と捉えられている。それゆえに、Ⅲの段階で留まるということは、現在の自分の心の中には、自分にも社会にも「好ましい、良い」ものである「モラル的な考え」に近いものがあるということは感じられているが、「好ましくない、悪い」ものである「反モラル的な考え」に近いものも同時にあるということはまだ感じられない、もしくは感じたくない状態だといえる。

Cさんに示される過程でにおいて、Cさんは世の中では強い者が生き残って当然であると考えていたのだが、c ちゃんが仮死状態で生まれてきた（Ⅰ）という事実に直面して、医学の力があれば弱い子も生き残れる、と感じ（Ⅱ）それからというものの「自然淘汰に任せて」という言葉は強者の言葉であると感じ、Cさん自身「自然淘汰」という言葉は絶対に使わなくなった（Ⅲ）と語っている。

このようなことから、ある意味では今の自分の抱いている考えというものが「モラル的な考え」に近いものだけであると思うことは母親にとっては安全な状態でもある気もする。しかし、この「安全性」はあくまでも母親の「意識」という側面からを眺めた場合の話である。おそらく母親の「意識」という

側面からだけではなくさらに深い観点から眺めてみれば、以前抱いていた考えというのは決して「無」にすることはできない類のものであろう。たとえ自分の意識では気付いていなくても、やはりどこか奥深くに存在してしまっているものに違いない。

Ⅲの状態で留まるということは、それまでとは対極的な視点を得たもののその視点から現在の自分にとっては好ましい一側面を眺め続けているということである。確かにそのままの状態であり続ける可能性はある。しかしながら、今度はもともと抱いていた好ましくない考えが現在の自分の中にも依然として存在しているという視点を得る過程というものが生じてくる可能性ももっている状態であるのではないかと考える。

(3) Ⅳの段階（「Ｉが生じる以前の考えとそれとは違う考えの両方が併存する」段階）について

今まで抱いていた考えと違った対極的な考えを自分自身の中に抱くようになった後、もう一度良く考えてみるとやはり今まで抱いていた考えも自分自身の中に存在していることが見えてくることがある。今回の研究において母親が自分の心の中に二つの対極的な考えが存在していることを語ってくれたのは、Aさんである。

Aさんは障害を持つ子どもに対して、本人が幸せだと感じていれば幸せなのではないか等と感じつつも時折以前に抱いていた悲しみの感情を現在でも抱いている、と語っている。そして、このような両極的な考えを抱いている自分自身について「私には、悲観的な側面があって。それは性分であって、なんぼやってもでてくるんですよ。この子がこんなんじゃなくても出てくることだと思うんですよ、レベルの差こそあれね」と語っている。

確かに両極的な二つの考えが自分の心の中に存在するからといって、二つの考えが同時に生じてくることは困難なことである。おそらく同じ対象に対してある時は一方の考えを別の時は他方の考えを支持するのであろう。そのような自分に気付いたとき、内的な葛藤ということは当然生じてくると思われる。特に、以前抱いていた考えが現在の自分にとって「反モラル的な考え」に通じるものである場合はこのような状態を認めることはかなりの苦痛を伴うことと思われる。しかしこのような時、どちらか一方の考えが生じる自分を尊重し、他方の考えを生じてしまう自分を否定してしまったりするのではなく、自分の心には両極的な考えが存在しているのだと思えることが重要なのではないかと考える。

以上の調査から、重症心身障害を持つ子どもを育てる母親が子どもとの関わりを通じて、どのように考え方が変わっていったのか、ということを見てきた。しかしながら、ある意味ではこれは、「母親」に焦点を当てた調査であるとも言える。この調査で対象となった母親は、子どもとの関わりで自らの心の中の対極的な考えを見出していくのであるが、一方で母親のそのような「視点の深化」を推し進めた「障害を持った子ども」についてもさらに考える必要性があるのではないかと思われる。

6. 神話や伝承に見られる障害を持った子どもの両極性

(1)神話や伝承のモチーフが示していることについて

面接調査を通じて以上のような母親の「視点の深化の過程」が見られたのだが、本頁では母親の視点の深化を推し進めることにもなった「障害をもった子ども」を中心に考えていきたいと思っている。

母親が障害を持った子どもに対して抱く考えというのは、「弱く、かわいそう」、「障害児だとすぐに分かる姿していたり行動をするため恥ずかしい」というものだけではなく、時を経るにつれて「今までとは違った考えを教えてくれたありがたい存在」というものも生じてくると論じられていることが多い。このような両極的な考えが生じてくる過程というのは、調査対象となった母親たちが偶々共通して抱いていた考えであるというよりは、むしろ個人という存在を超えた奥深い意味があるような気がしてならない。つまり障害を持った子ども自身にそのような両極的なイメージがもともと備わっているのではないか、と思われるのである。

C.G. ユングは、イメージという概念を「個人的イメージ」と「根元的イメージ」の二つに分けて扱っ

ている。前者のイメージは、個人的な起源のもの、つまり個人的無意識の内容や個人的に制約された意識状態を表していると考えており、後者のイメージは、非個人的な起源のもの、つまり集合的な意味を持ち、よく知られた神話の主題と一致しているような神話的性格が特徴である、としている（C.G.Jung 訳書1987,448頁）。C.G. ユングは根元的イメージを「元型」と名付けていたが、それは前述したような神話的性格を有しているために「少なくともあらゆる民族や時代に共通」であり、「つねに繰り返される一定の心的体験の痕跡であると同時にその典型的な基本形式」でもあり、「神話の主題としてつねに印象的に何度も表現され、そうして表現されると一定の心的体験を呼び起こしたり、ふさわしい形式を与えられたりする」ものであると述べている。そして「根元的イメージは、いつどこにでも現れるという点で、同じようにいつでもどこにでもある外界の働きかけと対応することになる」とも述べている（C.G.Jung 訳書1987 , 448-449頁）。

これらのことから、ある人に浮かんだ考えが個人的な体験に基づいた考えという枠にとどまらないのではないかと感じるとき、その考えは神話のなかにすでにモチーフという形で見出される可能性が考えられよう。

(2)神話や伝承にみられる「障害を持った子ども」について

神話の世界においては、子どもは童児神（つまり神の子供時代の姿）として語られている。K.ケレーニイ（1951）はギリシャ、ローマのみならずインド、フィンランドなどの神話や伝説などをを通じて、童児神のモチーフについて論じている。その論文の中でK.ケレーニイは童児神の多くが母親から引き離されたり、捨てられたり、母親に早くに死なれてしまったりしており、「孤独」という要素を有しているということを指摘している。またC.G.ユング（C.G.Jung 訳書 1999 ）はK.ケレーニイの童児神に関する論に関して心理学的な立場からさらに議論をすすめて「童児元型」という概念を想定し、その元型的イメージの特性について、「捨て子であること」「無敵さ」「両性具有性」「原始存在にして終末存在」という観点から論じている。

このように、神話の中で語られる童児神には共通の要素が見出されるようであるが、ここでは特に牧神パーンについて見てみようと思う。K.ケレーニイは先述の論文の中で童児神の孤独について述べているが、その中で牧神パーンは母親に捨てられたという孤独を有する童児神の一人として紹介されている。牧神パーンは「二本の角を生やし、山羊の脚をして、おまけに長い顎髭が赤ん坊のときからついてた」（呉 2000, 317頁）という奇怪な姿で生まれた為に、母親と乳母に逃げ去られてしまったが、父親がオリュンポスに運んでいったという。この神話から、K.ケレーニイはそこに「二つの運命圏が相対立する。すなわち一方の運命圏ではこの幼児神は見捨てられた奇形児であり、もう一つの運命圏では神々の間にまじってゼウスのそばに座を占める」（K. Kerényi 訳書 1979, 48頁）という一つのモチーフを見出している。

牧神パーンのように、「見捨てられた奇形児」と「（童児）神」という相対立する運命を担った存在は、日本神話、伝承の中にも見出される。「ヒルコ（水蛭子、蛭子、蛭児などと表記）」というイザナキ・イザナミの間に最初に生まれた子ども（第二子、または第三子という説もある）である。「ヒルコ」がどのような状態で生まれてきたのかは、未だもって議論されているところであるが、「子の例に入らず」（古事記、上つ巻）、「此亦児の数に充れず」（日本書紀、四段第一の一書）、「已に三歳になるまで、脚猶立たず」（日本書紀、五段第一の一書）と描かれていることや、ヒルコの表記には「蛭」という文字が用いられていることから、少なくとも身体的になんらかの障害をもって生まれてきた存在であろうという説がある[1)]。このような状態で生まれてきたヒルコは「この子は葦船に入れて流し去りつ」（古事記、上つ巻）、「便ち葦船に載せて流りき」（日本書紀、四段第一の一書）、「故、天盤橡樟船に載せて、風の順に放ち棄つ」（日本書紀、五段第一の一書）、「輙ち比の船を以て蛭児を載せて、流の順に放ち棄つ」（日本書紀、五段第二書の一書）というように船に流されて棄てられてしまうのである。その後のヒルコの運命について記紀においてはそれ以上の記述はないのであるが、他の言い伝えにおいては、ヒルコは流れ着いた先で「えびす様」として奉られたという説がある（大林・吉田 1998、柳田1978）。この説は、記紀の時代よりさらに後、平安時代末期に生じた説だといわれており、海の彼方からやってきたとされる七福神のえびす（蛭子、夷、

恵比寿、恵比須などと表記）神とヒルコが同一視されたことによって生じてきたのではないかと言われている。しかしここでは、ヒルコがえびす神として奉られることになった詳しい歴史的背景などについて論じることはせずに、むしろ、少なくとも身体的に障害があった為に海に流されてしまったという「見捨てられた奇形児」であるヒルコが、その後、えびす神という「神」として扱われるようになった、というような一つの物語を扱って論じていこうと思う。

確かに、K.ケレーニイやC.G.ユングが論じているように、多くの童児神からは捨て子であることに由来する「孤独」、無力で絶えず危険にさらされつつも超人的な力で解決する「無敵さ」、対立するものを結合した「両性具有的な存在」、「原始存在にして終末存在」という類のモチーフが見出される。牧神パーンやヒルコからもそれらの特性が見出されるように感じられる。しかしながら、牧神パーンとヒルコは通常の子どもの姿をしている神とは違って奇怪な姿をしており、いわば「障害を持っている」童児神なのである。それ故に、通常の童児神としての特性だけではなく、さらに「障害を持っている」童児神として何か特有の特性が見出されるのではないかと思われるのである。

「障害」というものは、多くの人々が最も嫌い、畏れることの一つであろう。なぜなら、障害は決して治らないもの、もしくは極めて未発達な状態のままであるものであり、障害を持っている人の姿形は醜くくあまり見たくないものでもあり、様々な点における大変さは感じたくないものであるからである。しかしながら、A.グッゲンビュールクレイグ（A. Guggenbühl-Craig 訳書1986）はあらゆる人において「障害者元型 Archetype des Indvaliden」という概念を想定し、何かあるものが欠けているとか極めて未発達であるという「不完全さ」の認識は「反-自我肥大的で、謙虚さを生み出す」という側面を指摘しており、「人間は自らの障害性のうちで自己を実現し、奇形のうちで完全性を成就する」（A. Guggenbühl-Craig 訳書1986, 30頁）という側面があることを論じている。これらのことから、「障害を持っている」童児神は、もちろん他の童児神と同じ特性をもっているのだが、さらに、何かあるものが欠けているとか極めて未発達であるという「不完全」な存在でもあり、それに由来する「不完全であるため嫌われる存在であるが一方でその中で完全性を成就するという神聖な存在」という両極的な特性を有しているのだと考えられる。

(3)障害を持った子どもの両極性を見出すことについて

これらのことから、母親が障害をもった子どもを育てていく中で、子どもにおける弱さ、永久に得られないことや限界、孤独、醜さなどを感じ続ける一方で、障害を持ちながらも生きている強さ、無いものが得られるのではないかという希望、神聖さ、人を和ませたり惹きつける魅力、色々なことを教えてくれるありがたさなどを感じていく過程とは、確かに母親の視点の深化の過程ではあるが、障害を持つ子どもの本質的な両極性を「見出していく」過程でもあると考える。さらに、障害を持った子どもとの関わりの中で母親が、自分自身の弱さ、限界、永久に欠けたままのところ、孤独、醜い考えに直面したり、またはそれまで以上の精神的な強さ、人に対する優しさ、謙虚さ、特別な存在であることなどを見出していく過程に関しても、母親において心理学でいう「投影の引き戻し」の機制が生じていると考えると、同様のことが言えるのではないかと感じている。

7. おわりに

このような母親の視点の深化の過程はその内容は個別のものではあるが、やはりその根底には個人を越えた人々に共通のモチーフが存在してるようである。それゆえに私たちの心の中にもどこかに「障害を持った子ども」という先述したような両極的な内容を含んだ存在があるように思われるのであるが、それを見出そうとすることは相当な困難を伴うように感じている。しかしながら、そのような存在を想定することだけでも重要なことなのではなかろうか。

今回の研究においては、障害をもつ子どもを育てる母親の視点の深化の過程と神話や伝承を通じて障害をもつ子ども自身の両極性について述べたが、今後は対極的な考えが見出されないという過程などを含めて研究をすすめていきたいと思っている。

＜注＞

1）ヒルコという言葉は蛭子（または水蛭子、蛭児）とも日子（日子とは日女［ヒルメ：アマテラスに対する名称］の対語だといわれている）、つまり太陽の子とも解釈できる言葉であるために、多くの研究においてヒルコの誕生は何らかの障害をもって生まれてきた子どもであるのか、それとも太陽神話の一部であるのか、と長年にわたって議論されているが意見は分かれたままである（大林・吉田 1998、服部 1976）。その他にもこの両説を統合した形の説もあり、次田（1973）は元来ヒルコは「日子」であったのが後年「蛭子」として扱われるようになったと論じているが、一方で小野（1977）はそれとは逆に元来は「蛭子」であったのが後年「日子」として扱われるようになったと論じている。本論文においてはヒルコを「蛭子」として論をすすめたのだが、ヒルコという一存在に対してこのような両極的な解釈が存在すること自体、筆者はとても意義深く思っている。

＜引用・参考文献＞

A. Guggenbühl-Craig. 1980. *Seelenwüsten.Betrachtungen über Eros und Psychopathie.* Schweizer Spiegel Verlag, Zürich. 長井真理訳. 1989.『魂の荒野』創元社

C.G.Jung 1967. *Psychologiesche Typen . Rascher Verlag.* 林道義訳. 1987.『タイプ論』みすず書房.

C.G.Jung 林道義編および訳. 1999.『元型論（増補改訂版）』紀伊国屋書店

服部旦. 1976.「国生み神話の構造」講座日本の神話編集部編 『講座日本の神話 3 天地開闢と国生み神話の構造』有精堂 : 76-101

石川友香. 2000.「重症心身障害児を育てる母親の視点の深化についての臨床心理学的研究」大阪大学大学院修士論文（未公刊）

James Hillman. 1975. *Re-Visioning Psychology* . Harper Perennial 入江良平訳 1997『魂の心理学』青土社.

K. Kerényi und C.G.Jung 1951. *Einführung in das Wesen der Mythologie - Das Göttliche Kind / Das göttliche Mädchen.* 4. Auflage Zürich . 杉浦忠夫訳. 1979.『神話学入門』晶文全書.

神田典城. 1988.「ヒルコの出現位置」『古事記・日本書紀論集』 続群書類従完成会

呉茂一. 2000.『ギリシャ神話(上)』 新潮社

小野明子. 1977.「日本神話とインドネシア神話」 大林太良編 『日本神話の比較研究』法政大学出版局 : 159-200

大林太良・吉田敦彦監修. 1998.『日本神話事典』 大和書房

坂本太郎他校注. 1994.『日本書紀(一)』 岩波書店

武田祐吉=訳注. 2000.『新訂 古事記』 角川書店

次田真幸. 1973.『日本神話の構成』 明治書院

柳田國男. 1978.「海神宮考」『海上の道』岩波書店

A Study on the Process of Deepening Viewpoints of Mothers Bringing up Her Handicapped Child

- Through case studies of mothers bringing up her severely handicapped child and mythical motief of a child prodigy -

ISHIKAWA, Yuka

It is difficult but important for us to perceive that we have two oppositional aspects. In this study , I took those processes as "the processes of deepening viewpoints" , and I assumed it to be based on "seeing through" prosess which J.Hillman dealt with. I interviewed mothers bringing up her severely handicapped children to reserch on their viewpoints deepening processes, and dealt with those processes from the viewpoint of depth psychology . On one hand, I turned my attention to a handicapped child that deepened the viewpoints his mother, and tried to suggest what kind of factors a handicapped child have essencially to be based the concepts of "mythical motief" . Especially, I took Pan , the god in Greek myth, and Hiruko, the god in Japanese myth and folklore, and I dealt with factors which those gods would have. I assumed those factors were connected in the two oppsitional images which mother has for her handicapped child and herself.